19. 鎌・早稲・おくて

摂津市域では稲刈りをタカリ、ターカリ（田刈り）と呼んだ。稲刈りにはノコギリガマを使った。農家ではワセ（早稲）とオクテ（晩稲）を組み合わせて作っていた。

◆ノコギリガマとカマ

〈A〉はノコギリガマ（鋸鎌）で刃の長さ 16.5cm、柄は 20cm。刃に鋸目が切ってある。〈B〉のカマは刃の長さ 13.5cm、柄は 33cm で、柄尻には滑り止めの返りがついている。稲刈りや麦刈りには〈A〉の鋸鎌、草刈には〈B〉の鎌を使った。

鎌はとりおき砥石で研がなければ切れ味が保てないが、鋸鎌は研がなくていいので初心者でも差が出ない。鋸鎌の刃の面は湾曲していて稲株を低い位置で刈り取ることが出来る。鋸鎌は消耗品で軽くて安い、と研究書にはある（稲野藤一郎『ハサとニホ』）。

◆鎌は古墳時代から

稲作を伝えた弥生人達は三日月形の石包丁で稲の穂を摘みとった。この石包丁も弥生時代の末には姿を消し、古墳時代から鎌が出現する。鎌は北方畑作系の農具である。

◆早稲と晩稲は平安時代から

早稲と晩稲は『古今和歌集』（905 年）や辞書の『和名類聚抄』（934 年頃）に出てくるから、平安時代初めにはもう当たり前の品種として使い分けられていた。

◆昔はオクテが多かった

現在は早稲が多く作られているが昔は晩稲が多かった。晩稲はトリミ（取実＝収穫量）が多く 1 反で 1 俵の差が出た。早稲より晩稲が美味しい。穂も長く丈も高くて、その分よくこける。「オクテはドブシ（倒伏）があるからカナン（かなわん＝困る）」（鶴野）。

早稲は収穫は少ないが 20 日程成長が早くて二毛作向き。そこでムギタ（麦田）、ムギジ（麦地＝乾田）では早稲、ドタでは晩稲を作った。その他稲刈り時期の人手や作業の段取りも考えて早稲、中稲、晩稲を組み合わせた。稲木も 2〜3 回場所を移して使った。

◆わらの利用にはオクテ

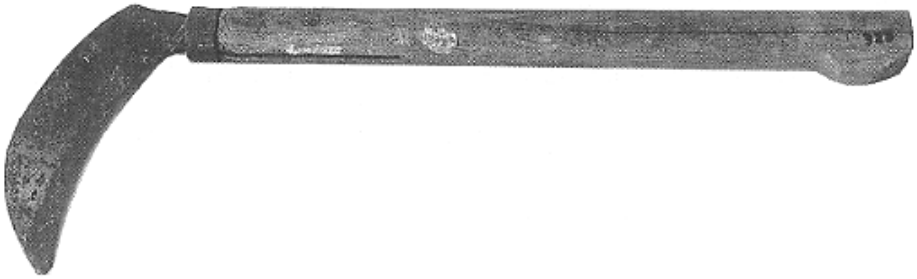
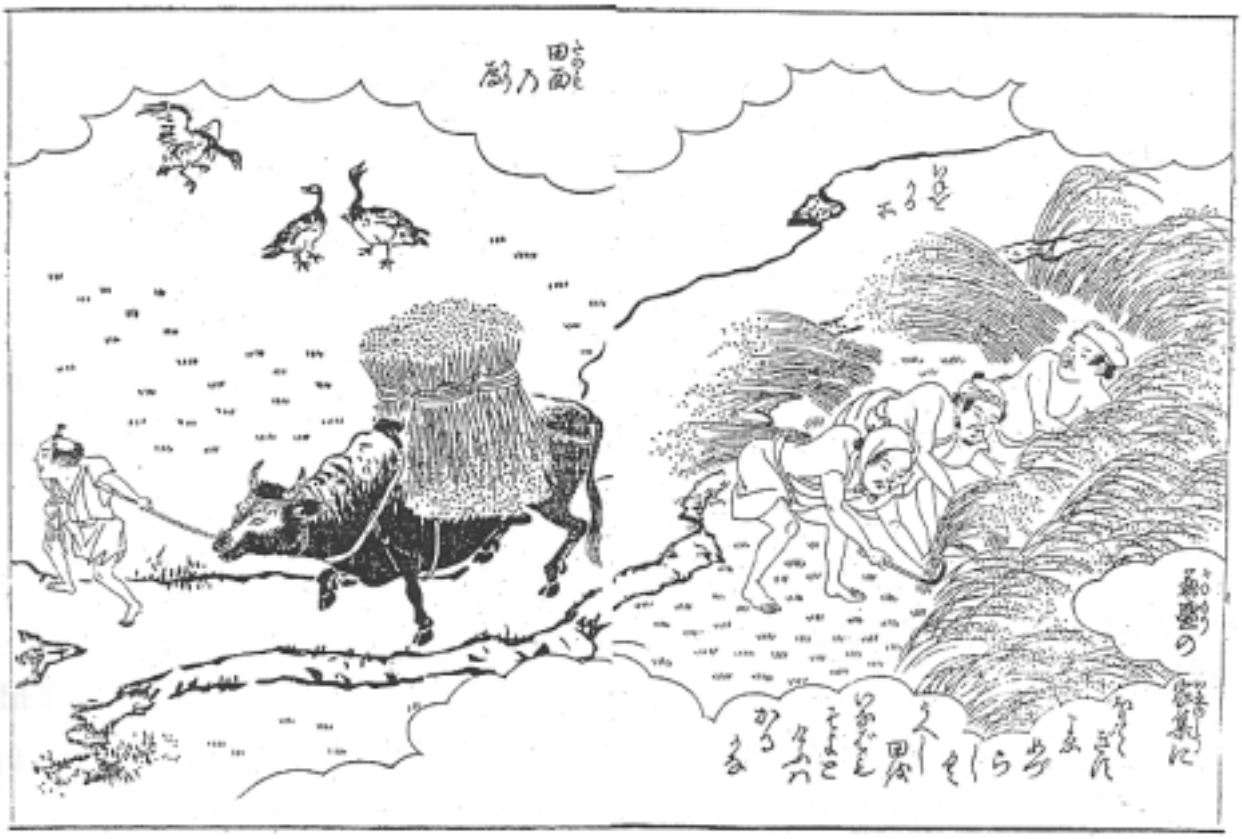
縄をなったり、むしろを織るにはわらの長い晩稲がいい。早稲は 70cm、晩稲なら 1 m。〈C〉は『農具便利論』の江戸時代の稲刈り。藁が心持ち長いのは晩稲であろう。

◆冷たかったオクテの田刈り

早稲の田刈りは 10 月 10 日頃、晩稲は 11 月 3 日を過ぎなければアカラない（赤く稔らない）。手が足りないとオクテのタカリは 12 月にかかる。霜の降りる頃のドタのタカリは冷たい。ゴム長履いてナンバ（板なんば）を履いた（別府）。

A

B



C